



柴 幸男 (ままごと) × あいちトリエンナーレ 2010

公募共催事業 祝祭ウィーク参加作品

あゆみ

2010年10月15日[金] 愛知県芸術劇場小ホール

○『あゆみ』とは？

『あゆみ』は20分の短編版として08年1月、劇作家協会東海支部プロデュース「劇王V」にて長久手町文化の家風のホールで初上演されました。結果は惜しくも劇王の座を明け渡すものとなりましたが、劇王至上まれにみる接戦となり、鹿目由紀氏（劇団あおきりみかん）、平塚直隆氏（オイスターズ）、による決勝3作品はどれも高く評価されました。

その後、同年6月にこまばアゴラ劇場にて長編版『あゆみ』を上演。東京の小劇場界に口コミで広まり、追加公演も満席になるほどの評判を呼びました。計7日間、全11ステージ（追加公演込み）で1000人超の動員を記録。その後も短編版はシアタートラムや長久手町文化の家にて再演され、劇評はWEBや雑誌に多数掲載されました。

2010年1月には野田秀樹氏が芸術監督に就任したことで知られる東京芸術劇場にて短編版の再演も決定しています。「あゆみ」は劇作家・演出家、柴幸男の代表作であり、今後もレパートリーとして改訂、再演し続けることになる作品です。

○なぜ愛知で『あゆみ』なのか？

今回、柴幸男（ままごと）の地元である愛知県にて長編版『あゆみ』を改訂・再演します。この、あいちの『あゆみ』の出演者は、愛知県内においてワークショップオーディションを開催し、選出します。また、稽古も愛知県内で行います。私は、作品を「どこで、誰と作り、誰に見せるか」を重要と考えました。供給過多な東京演劇と地方演劇の溝は深いままです。私はこの作品で、創作から発表までを地域で実現する「演劇の地産地消」と、地方演劇と東京演劇をつなぐ「演劇のバイパス」を目指したいのです。また本公演のロングラン化、東海圏内の巡演、関東やその他の地方での上演にも、積極的に挑戦していこうと考えています。

○ワークショップ・高校演劇・地方演劇としての『あゆみ』

『あゆみ』は、ワークショップや地方との共同制作にて広く上演されています。09年には目黒区芸術文化振興財団主催のもとめぐろパーシモンホールにて中高生を対象に「あゆみワークショップ」を行い、最終日には『めぐろのあゆみ』として20分の発表を行いました。また同年、青森県弘前中央高校演劇部にて畑澤聖悟氏（渡辺源四郎商店）脚色のもと上演され、高校演劇大会の東北大会まで現在進出中です。また2010年1月に福島県いわき総合高校のアトリエにて生徒出演の『いわきのあゆみ』を創作・上演します。『あゆみ』は単なる演劇作品を超えて、ワークショップや高校演劇、地方との共同作業に非常に効果を発揮しています。

○最後に、

ある都市に生まれた一人の女性の人生を、その都市で、その都市の人々と作る。それこそが、いま私が、劇作家・演出家としてもっとも興奮する作業です。

私は愛知県で生まれ、愛知県で育ちました。私の生まれた町、木曾川町には劇場はありません。だから東京で演劇活動をしているときも、ふとこんなことを考えます。「あの町にいる人たちはいったいどうやって演劇に触れているのだろうか」と。東京には演劇作品があふれていて、もう誰もすべてを見ることができない状態です。そんな場所で演劇作品を作ることに意義はあるのだろうか、そんなふうに思うこともあります。自分が生まれた場所のこと、また地方の演劇状況のこと、そんなことを考えていたときに、このあいちトリエンナーレ「祝祭ウィーク」の募集を見つけ、公募に参加しました。この企画は、今後の自分の活動場所、作品性を方向づけるものになると思います。本企画にご支援、ご協力をいただけたら幸いです。『あいちのあゆみ』をよろしく願います。

柴幸男

「あゆみ」

とある地方都市に"私"は生まれた。

初めて立ち上がったときも、
母親とはぐれて必死に探したときも、
大嫌いな男子との登下校も、
同級生にいじわるして先に帰ったときも、
憧れの先輩をこっそり追いかけるときも、
将来が見えなかったあの雨の日も、
家を出て一人暮らしをはじめたときも、
人生のパートナーと出会ったときも、
「あゆみ」が生まれたときも、
大切な人を失ったときも、
私は歩き続けた。



08年6月こまばアゴラ劇場「あゆみ」

一人の女性の"最初の1歩"から"最後の1歩"までを優しく静かに、そして力強く、語る。
それが「あゆみ」。

『あゆみ』の作品特徴

『あゆみ』は女性8人～10人、いや8人以上であれば何人でも出演可能な作品です。『あゆみ』の特徴はまず“キャスト全員が、一人の女性を演じる”という演出にあります。これはある種、残酷とも言える役者の交換性を突き詰めることによって、役者個人の根幹的な個性を浮き上がらせる手法です。一人を全員で演じる『あゆみ』には"役者の人数制限・年齢制限"がありません。むしろより幅の広い年齢、人数の役者が参加することにより、作品の奥行きが増すように出来ています。ですから幅広い出会いの可能性のあるワークショップオーデイションは、『あゆみ』の作品性をより高めるはずと考えます。

また突出して凡庸なエピソードを積み上げることによって、観客の誰もが自身の記憶を重ねあわせてしまうという戯曲構成も『あゆみ』の特徴です。今回は、地方都市を舞台にしている物語の設定を"愛知"に特定し、戯曲を改訂します。現代に生きている方言を、ことさらに取り上げるのではなく、自然に戯曲に練り込みたいと考えています。弘前中央高校による「あゆみ」も、福島県いわき総合高校による「あゆみ」も方言によって語られました。今回の「あゆみ」も、愛知ならではの言葉で創作することによって、どこにもない「あいちのあゆみ」が誕生するはずです。



柴幸男（劇作家・演出家・ままごと主宰）

1982年生まれ愛知県出身。青年団演出部所属。

日本大学芸術学部在学中に『ドドミノ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。

何気ない日常の機微を丁寧にすくいとる戯曲と、ループやサンプリングなど演劇外の発想を持ち込んだ演出が特徴。全編歩き続ける芝居（『あゆみ』）、ラップによるミュージカル（現代口語ミュージカル『御前会議』）、一人芝居をループさせて大家族を演じる（『反復かつ連続』）など、新たな視点から普遍的な世界を描く。

2009年度春期ENBUゼミ専任講師。劇作家協会東海支部プロデュース劇王への参加や、可児市文化創造センターでの戯曲講座、福島県いわき総合高校での演出など、東京を拠点に地方公演やワークショップなど精力的に活動している。

現在、シアターガイドにて「まちびときたる」を連載中。

【主な活動歴】

青年団リンク ままごと「わが星」作・演出

キレなかった14オリたんず「少年B」作・演出

toi presents 4th「四色の色鉛筆があれば」作・演出

多摩川アートラインプロジェクト 2008 多摩川劇場「川のある町に住んでいた」作・演出

toi presents 3rd「あゆみ」作・演出

青年団若手自主企画 vol.36 現代口語ミュージカル「御前会議」潤色・演出

劇作家協会東海支部プロデュース 劇王V参加「あゆみ」（短編）作・演出

【ワークショップ】

パーシモン・パレット・プログラム 2009 演劇コース 「夏休み演劇ワークショップ」

主催：（財）目黒区芸術文化振興財団

世田谷パブリックシアター土曜劇場プレイパーク 「エンゲキで遊ぶ」

主催：財団法人せたがや文化財団

「青年団と千種文化小劇場による演劇ワークショップ」

主催：名古屋市千種文化小劇場・青年団

演劇ラボ 短期集中講座 セツ寺共同スタジオ提携企画 「柴幸男と劇場で作品を創る」

主催：東海シアタープロジェクト 提携：セツ寺共同スタジオ

WALK 57号「あゆみ」

柴の作品の特徴は、サンプリングやループといった異ジャンルの手法をベースにした上演内の時間操作と、物語性の強さにある。『あゆみ』という作品では、十人の女優が舞台上を上手から下手へと順番に歩いていながら、ひとりの女性の役柄を交代で演じていくという手法で時間の流れを表し、少女が成長し、母親になるまでの物語を描き出していく。こうした演出の意匠をガジェット（仕掛け）と言ってしまえばそれまでだが、柴はこの意表を衝く仕掛けを通して、十五分足らずの短い時間のなかにも、ひとりの人間の生涯という壮大な物語を立ち上げるという卓越した手腕をみせるのである。

(小澤英実)



08.06 toi presents 3rd 『あゆみ』



09.01 toi presents 4th 『四色の色鉛筆があれば』

シアターアーツ 09春「四色の色鉛筆があれば」

各作とも二十～三十分ほどの短編で一見内容的連続性や関連は無いが、全体に共通する方法として、①時系列を一旦バラバラにして並び替えること、②一人の役者が複数の役柄を演じること、の二点が挙げられる。柴の舞台作りの鍵はこの二つの方法にあると思われる。(中略)たとえば『あゆみ』は、「あゆみ」という名の少女と、幼なじみの友人の交流を三人の女優がランダムに代わる代わる演じる。(中略)なかでも心に残ったのは、成長した友人がふと立ち止まって、幼い頃の自分たちを見ているようなシーンである。大人のわたし自身が、心細げな子供時代の自分に向かって「大丈夫、大丈夫」と声をかけてあげたくなるくらいに、心が揺れた。

(小田幸子)

MUSIC MAGAZINE 09年6月号「少年B」

クラス内ではイケてないグループに属し、友人とサムい漫才を作っては悦に入っている“イタイ”主人公。(中略)“青春は例外なく不潔である”という吉本隆明の言葉そのままの世界が提示される。(中略)主人公が脱げなかった学ランは単なる虚栄心の暗喩ではなく、決意と覚悟の象徴でもあるだろう。だから、その彼が最後に見せる「相変わらず不安定だ。でももうちょっとだけふんばってみよ」という独白はどこか柴の実感とダブリ、静かな感動を生む。

(土佐有明)



09.04 キレなかった14オ♥りたーんず『少年B』

■ 「あゆみ」公演概要

柴 幸男(ままごと) × あいちトリエンナーレ 2010

公募共催事業 祝祭ウィーク参加作品

あゆみ

作・演出 柴幸男

○ CAST

ワークショップオーディションによって決定。5月中旬に愛知県内にて開催予定。

○ 会場

愛知県芸術劇場小ホール

〒461-8525 愛知県名古屋市東区東桜一丁目13番2号

WEB <http://www.aac.pref.aichi.jp/>

○ 公演日程

2010年10月15日(金) 2ステージ(1ステージは公開リハーサルの予定)

○ 料金(予定)

【前売】一般 2,000円 【当日】一般 2,500円

○ 主催・お問合せ

ままごと 担当/宮永琢生 TEL 090-2561-8730 FAX 042-734-8355



「あゆみ」

2008年6月

こまばアゴラ劇場

■ 初演の「あゆみ」に寄せられたコメント

去年1年間に、柴幸男の「反復かつ連続」について、私は何人の人に語ったことだろう。意表をつくアイデアとそこで繰り広げられた演劇の豊かさを、だれかれかまわず教えたくてたまらなかった。そして1年後の今年1月、柴は「あゆみ」を上演して、さらに私達をうならせた。3人の女がただただ歩き、話すというシンプルこの上ない作りで、何層もの時間と空間を、そして人が生きていくということ、想像させたからだ。だから私はまた、だれかれかまわず柴幸男という新しい才能について話している。

安住恭子氏（演劇評論家）

『あゆみ』を観たのは、『劇王V』という名古屋の短編芝居コンテストでした。面白かった。シンプルな舞台に、シンプルな言葉のやり取りで紡がれてゆく、ノスタルジア。あんなに素敵な『世界』と決勝で戦えた事、とても光栄に思っております。柴さんは本当に凄い。日光に当たってなさそうな、申し訳なさそうな顔をしているのに、実は目の奥が笑っていないのも凄い。どんな『あゆみ』に生まれ変わるのか、楽しみでなりません。

鹿目由紀氏（劇団あおきりみかん主宰・劇作家・演出家）

泣いた泣いた。2年連続で泣かされた。柴幸男はまさしく天才である。その着眼点・発想・実験性は常人が努力して得られるものではない。そして何よりも、心の琴線をワシツカミにする天才なのだ。しかももしか、涙を流す誰もがこの感情を何と名付けたらいいのかわからず戸惑ってしまうのだ。彼の演劇は、素晴らしい芸術と優れた娯楽を味わえるとともに、演劇の未来までも予感させてくれる。それも、たったの20分間で。私ども日本劇作家協会東海支部による短編演劇タイトルマッチ「劇王」で上演された、『反復かつ連続』そして今回長編として再誕する『あゆみ』は、そういう衝撃的大傑作だった。

刈馬カオス氏（劇作家・演出家・日本劇作家協会東海支部事務局長）

まず、立つ。アンドロメダから光が放たれた頃、人類は立った。つまりその当時の人類にはアンドロメダの輝きは観ることが出来なかったのだ。ヒトは何のために立ったのか。たぶん歩くためだろう。ひとは立てるところにしか立てない。地上30cmの高さに張ったロープの上にすら立てない。ふつうに立って歩いていると思っているのはヒトの傲慢さからくる錯覚である。舞台に立つ、その不安と所在無さは原始の直立二足歩行に由来する。立つ、歩く、ポテンシャルからのエネルギー転換がヒトに何をもたらすか、未だにワカッていない。

北村想氏（劇作家・作家・エッセイスト）

柴君という人は一見すると線が細くてひ弱い男に見える。いや、実際そうなのだ。しかしそういう男に限って頑固で融通がきかない。柴君はその典型であると僕は確信している。なぜなら彼は自分の演劇的ヒラメキに徹底的にこだわる。アイデアを出すのは案外楽だ。重要なのはそれを昇華させる狂気である。間違いなく彼はオカシイ。で、僕は彼の化学者にも似た頑固さが羨ましくて仕方がない。次はナニとナニを融合して見せてくれるのが楽しみで仕方がないのだ。

佃典彦氏（劇作家・演出家・俳優、B級遊撃隊主宰）

できれば出会いたくなかった「同業者の天才」は2人だけいて、その一人が柴君です。天才の仕事は6分間舞台を見れば判ります。もちろん最初の直感をもっと瞬間的に訪れますが、自分のプライドを捨てるのに6分かかります。劇王の祝賀会の帰り、僕は飲むのを堪えて車で彼を実家に送りました。彼の地理感覚は中学生並でしたが、劇作は年齢とか経験ではありません。あ、ちなみにもう一人はオリザさんです。もちろん彼も年下です。

はせひろいち氏（劇作家・演出家、劇団ジャブジャブサーキット代表）

長久手町文化の家で行なわれた短編作品の競演「劇王V」で発表された「あゆみ」のロングバージョンをつくと聞いた。少女から大人の女性になっていくそれぞれの登場人物の心模様を作品にした「あゆみ」は、いじらしくも、もどかしい“オンナの子”の感情を“オトコ柴”はリアルに描いてみせた。記憶の片隅に忘れがたいそれはどこか懐かしい風景に“柴ワールド”の普遍性を見た思いだ。「柴さん、なぜそんなにオンナの子の気持ちがわかるの・・・？」

初山勝人氏（長久手町文化の家）

柴幸男 × あいちトリエンナーレ 「あゆみ」

【演劇の「交換可能性」と「単独性」】 松井周 (サンプル主宰、劇作家・演出家・俳優)

「私はどこにでもいる他の誰かと変わらないありふれた存在だ」という感覚は、誰でも感じられることのように思える。これを仮に「交換可能性」と呼ぶ。また、「私はただ一人であり、他人もそれぞれ唯一の存在だ」という感覚も誰でも感じるであろう。これを「単独性」と呼ぶ。この二つは相反する概念のようでありながら、演劇においては実はあまり矛盾しないかもしれない。

元々戯曲というものは「交換可能性」を前提に書かれている。誰がどの役を演じても構わないわけだ。それで何千年も何百年も生き残って来ているわけで。また、「演じる」という行為そのものが「私」という垣根を取り払い、「他者」になろうとする行為なのだから、「交換可能性」とは演劇の代名詞のようでもある。(中略) この「交換可能性」と「単独性」をめぐってしきりに考えさせられた舞台がtoiの『あゆみ』である。

ほとんど素舞台に近い舞台で、奥に白く大きいスクリーンのような布が一枚かかっているだけ。物語上の主要人物は一人の女性。彼女が初めて歩いた時から物語が始まる。父と母がそれを見守る。彼女は右から左へ歩いていく。父と母もそれを追う。そして白い布の裏側に去っていく。彼らの動作とクロスするように、また一人の俳優が他の俳優に手を引かれながら、右から左へと歩いてくる。スクリーンの前で立ち止まると、手を引いてる者におもちゃをねだる。手を引く者はそれを聞かずに手を引っ張って左へ歩いていく。すると、今度はまた二人の俳優が現れて、一人が別のおもちゃをねだる。先ほどのおもちゃより若干年齢層が高そうなおもちゃを。そしてまた二人は左へ去っていく。すると、また…

このループが続くうちに、これは親子二人の会話を異なる十人の女優達がバトンタッチしながらリレーをしていることがわかってくる。連続した時間である場合も何年かの時間が経過している場合もある。親子だけでなく、時には友達、犬なども含めて全ての役が歩き去ることによって、歩み寄ってくる後続の女優達にバトンタッチされていく。

会話の内容はとてもベタなものである。幼い頃、犬がついてきたから家に入れてしまったけど父に「飼ってもいいか」と聞く場面であったり、仲のいい友達を裏切ってしまった。そのことを一瞬悔やんで立ち止まる主人公の背中を押す友達は「数ⅡB」(?確かではありません)の話題を振るところから、もう高校生になっていることがわかり、あつという間に時間が経過している。そこから今度は、憧れの先輩への告白→言えずじまい、上京、OL時代、結婚、出産、育児、親の死などの場面がループしていく。先にベタと書いてしまったが、改めて言い直すと、突出して平凡と言える。それは誰もがどこかで経験したかもしれないと思わせる、つまり経験してなくてもそう思わせてしまうような純度の高い会話であり、その切り取り方、貼り合わせ方が舌を巻くほどうまい。どこことなくスタジ オジブリの映画を思わせる。(中略)

最後は看護師(?)に付き添われた主人公が覚束ない足取りで、右から左へ歩いていく。そこにリズム音が重なる。彼女を追い越したり、すれ違う者たちや回想の自分などが様々な歩き方、別のリズムで重なる。ダンスシーンのようでもある。そのポリリズムが終わると、彼女は一人で最後の一步を踏み出して、暗転する。

選りすぐられた平凡なエピソードの積み重ねにより浮かび上がる最大公約数的な女性の一代記を、複数の俳優が厳格なシステムにのっとり作りあげたということの非凡さが『あゆみ』の特徴であった。(中略)

『あゆみ』という作品では「単独性」が抑圧されていると先に書いたが、それでもこぼれおちる俳優の身体性はあって、歩き方や喋り方は俳優によってかなり違う。しかし、それも「交換可能性」の強固なシステムによって縛られているからこそ改めて見出されるものであったように思う。演出家がこのこぼれ落ちたものを積極的に捉えているのか消極的に捉えているのかの判断は難しい。どちらの面白さも現れていたように思うから。もしかしたら迷っていたのかもしれない。それでもこれだけ刺激的な作品に出会えたことは、大きな喜びであった。



御担当者様

平素より大変お世話になっております。

本企画は今後、他地域での国内公演を視野に入れた作品創作を行っております。

本公演に関しまして、ご要望・ご質問等ございましたら、下記連絡先までお問い合わせ下さい。
詳細をご説明致します。

舞台写真、稽古場の取材・撮影等も、ご要望に応じて対応させていただきます。

また、柴幸男による演劇ワークショップ（一般向け／演劇経験者向け）、講義のご依頼も常時受け付けております。お気軽にお問い合わせ下さい。

皆様のご来場を心よりお待ちしております。

■ 本公演に関するお問い合わせ ■

ままごと
担当／宮永琢生

〒195-0072 東京都町田市金井 6-47-12

TEL 090-2561-8730

FAX 042-734-8355

MAIL zuqnz.miyanaga@gmail.com

<http://www.mamagoto.org> [ままごと]